

ギリシャ語を話すユダヤ人とヘブル語を話すユダヤ人との間に起こった「やもめの配給についての問題」は、教会に分裂の危機をもたらしました。しかし、この問題を真摯に受け止めた使徒たちは、御霊と知恵とに満ちた7人を選ぶことで、彼らに毎日の配給に関わる奉仕を任せ、自分たちは、祈りとみことばの奉仕に専念するのです。その結果、教会は分裂するどころか、ますます神のこばを広めるようになります。

そのようにして、エルサレムで弟子の数が非常に増え、また、多くの祭司たちが次々に信仰に入ったというのですから、それは実に、主のみわざ（奇蹟）であったという他に表現がありません。でも、それは、主イエスが弟子たちに語っておられたこと、すでに約束しておられたことでした。使 1:8「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります」。

キリストの証人となるのは、誰ですか？誰が、聖霊による力を受けて、いつでも、どこでもキリストを証する者となるのでしょうか？それはすべて主イエスを救い主と信じる人、悔い改めと信仰をもってキリストにつくバプテスマを受け、賜物として聖霊を受けた人々です。ですから、私たちもまた、自分自身をキリストにつく者だというならば、使徒たちと同じ御霊をいただいている者として、その力に満たされ、いつでも、どこでもキリストの証人として歩むことに、人生のフォーカスを置くべきです。

今日の箇所が登場してくるステパノも、公には毎日の食卓の奉仕に当たる者として任命されましたが、彼もまた聖霊を受け、恵みと力とに満たされた者として、すばらしい不思議なわざとするしを行うことでキリストを証していました。8節に「さて、ステパノは恵みと力とに満ち、人々の間で、すばらしい不思議なわざとするしを行っていた」と書かれてある通りです。

ここでステパノが、具体的にどのような不思議なわざとするしを行っていたかは記されていないのでわかりません。でも、それが病人や悪霊に苦しめられていた人のいやしであったことは、容易に推測できます。そして、それらは当然、主の御名によってなされていたと思うのですが、おそらく彼もまた、使徒たちのように、主イエスのことを宣べ伝えていたのでしょう。というのも、彼に対して敵対する者たちが現れるからです。

9-10節「ところが、いわゆるリベルテンの会堂に属する人々で、クレネ人、アレキサンドリヤ人、キリキヤやアジヤから来た人々などが立ち上がって、ステパノと議論した。10 しかし、彼が知恵と御霊によって語っていたので、それに対抗することができなかった」。

この「リベルテン」とは、ラテン語で「自由にされた者」の意味で、奴隷から解放されたユダヤ人、あるいはその子孫を指しています。会堂は、ユダヤ人の礼拝と教育のために、エルサレムをはじめ、ユダヤ人の住む各地に建てられていたので、彼らはそれぞれクレネ人、アレキサンドリヤ人といったアフリカ系のユダヤ人、またキリキヤ、アジヤといった今のトルコの方から来ていたユダヤ人たちでした。

彼らの議論の内容は記されていないので想像するしかありませんが、ユダヤ人たちがステパノを訴えている内容からして、それは聖なる所（神殿）とモーセの伝えた慣例（律法）に関してであったようです。でも、ステパノが知恵と御霊によって語っていたので、彼らは対抗することができませんでした。そのため、ある人々をそそのかし、また指導者たちを扇動して、ステパノを処刑しようと議会に連れ込むのです。

11-14節「そこで、彼らはある人々をそそのかし、『私たちは彼がモーセと神とをけがすことばを語るのを聞いた』と言わせた。12 また、民衆と長老たちと律法学者たちを扇動し、彼を襲って捕らえ、議会にひっぱって行った。13 そして、偽りの証人たちを立てて、こう言わせた。『この人は、この聖なる所と律法とに逆らうことばを語るのをやめません。14 『あのナザレ人イエスはこの聖なる所をこわし、モーセが私たちに伝えた慣例を変えてしまう』と彼が言うのを、私たちは聞きました。』」。

ここで確認したいことは、ステパノに対する人々の訴えが、偽りであったということです。彼らの言うように、ステパノがモーセと神様をけがすことばを語ったわけではなく、それは彼らの作り出した嘘でした。です

から、主イエスが、聖なる所としての神殿をこわし、モーセが伝えた慣例としての律法を変えてしまうと言うのも偽りです。では、彼らはなぜそんなことをしたのか？それは、聖所と律法を汚す者として、ステパノを宗教裁判にかけて死刑にするためです。それほど彼らのうちに、弟子の数がエルサレムで増えること、また祭司たちが次々に信仰に入っていくことに対するフラストレーションが溜まっていたのではないかと思います。

そのようにして人々の間ですばらしいことをしていたステパノは、無理に議会へと連れて来られるのですが、いかがでしょうか？もしこんなことがあなたの身に起こったら、どうですか？あなたが信仰によって善いことを人々に行い、でも、それをねたむ人々によって、苦しめに遭うとしたら、どうですか？その時のステパノの様子を見てみましょう。15節「議会で席に着いていた人々はみな、ステパノに目を注いだ。すると彼の顔は御使いの顔のように見えた」。驚くことに、彼の顔は、御使いの顔のようであったとあります。

そして、ここからステパノのメッセージが始まるのです。ご存知のように、この後、彼は殉教の死を遂げます。そして、教会に対する大迫害がここから始まるのです。そのことを覚えつつ、彼のメッセージを見ていきたいと思いますが、一度に見るには長すぎるので三回に分けます。今日は、2節から16節までの「アブラハムからヨセフの時代まで」、次週は、17節から38節の「イスラエルのエジプトでの奴隷からモーセによる解放と律法の授与まで」、最後に39節から53節の「イスラエルの背信と幕屋と神殿について」を見ます。

リベルテンの人々の訴えからすると、彼らは自分たちが神殿と律法を重んじる者、つまり、神の民であると自負しているのがわかります。ですから、自分たちは神のみこころを行っていると彼らは考えていました。でも、その彼らの目は、律法が禁じる偽りの証言や殺人に対しては閉ざされていたのです。そんな彼らに対してステパノは、モーセではなく、彼らが父と呼ぶアブラハムから話を始めます。つまり、すべてはモーセから始まったのではなく、彼よりももっと先のアブラハムからであることを伝えるのです。

2-5節「兄弟たち、父たちよ。聞いてください。私たちの父アブラハムが、ハランに住む以前まだメソポタミヤにいたとき、栄光の神が彼に現れて、3『あなたの土地とあなたの親族を離れ、わたしがあなたに示す地に行け』と言われました。4そこで、アブラハムはカルデヤ人の地を出て、ハランに住みました。そして、父の死後、神は彼をそこから今あなたがたの住んでいるこの地にお移しになりましたが、5ここでは、足の踏み場となるだけのものさえも、相続財産として彼にお与えになりませんでした。それでも、子どももなかった彼に対して、この地を彼とその子孫に財産として与えることを約束されたのです」。

ステパノは、自分を訴える人々に対して、「兄弟たち、父たちよ」と呼びかけることで、自分も彼らの同胞であることを伝えています。そして、ここで問題とされていたモーセではなく、彼らが父と呼ぶアブラハムから話を始めるのです。ただ「アブラハムから」といっても、彼が自分から何かを考え、行動に移したのがその初めではなく、それは神様でした。今読んだように、栄光の神がアブラハムに現れて、「あなたの土地とあなたの親族を離れ、わたしがあなたに示す地に行け」と命じられたのが、事の始まりだったのです。

また、それは「この地を彼とその子孫に財産として与える」という神様の約束に基づいていました。ご存知のように、当時のアブラハムは、すでに老年でしたが、彼には子がなかったのです。ところが、神様は、彼に子を与えること、つまり、この地（イスラエル）を彼と彼の子孫に与えることを約束されました。さらに、その約束の実現に至るまでには、彼の子孫たちが、外国（エジプト）で奴隷になることも語っておられたのです。

6-7節「…『彼の子孫は外国に移り住み、四百年間、奴隷にされ、虐待される。』7そして、こう言われました。『彼らを奴隷にする国民は、わたしがさばく。その後、彼らはのがれ出て、この所で、わたしを礼拝する』」。この内容は、次週のところですが、この時にモーセが登場するのです。エジプトで奴隷となり、苦しんでいた民の叫びを聞いた神様が、彼を遣わし、イスラエルの民を約束の地へと導くためでした。

8節以降のところには、神様が、ご自分の約束に基づいて、アブラハムに割礼の契約を与えられたことが記されています。そして、彼にイサクが、イサクにはヤコブが、ヤコブには十二人の族長たちが与えられるのです。そのうちのヨセフは、兄たちに憎まれ、エジプトに売られます。でも、神様は彼と共におられることで、あらゆる患難から彼を救い出し、エジプトの総理大臣となるころまで導くことで、飢饉の中で苦しむヤコブとその子ども達を、神様は救われるのです。そのようにすべては神様のご計画（約束）の中でありました。

ステパノのメッセージは、この後も続くので、ここで結論というわけには行きません。でも、今日のところから少なくともいえること、それは神様の祝福（救い）は、も一セではなく、アブラハムから始まったということです。そして、それは神様の一方的な選びによること、つまり、彼を祝福するという約束に基づいていました。ですから、ユダヤ人たちが主張する人間の正しさや行いによって、神様の祝福は得られるものではありません。それはアブラハムという人を選び、彼と彼の子孫を祝福すると約束された神様の約束に基づくのです。

使徒パウロはこう語っています。ガラ 3:16-18 「ところで、約束は、アブラハムとそのひとりの子孫に告げられました。神は『子孫たちに』と言って、多数をさすことはせず、ひとりをして、『あなたの子孫に』と言っておられます。その方はキリストです。17 私の言おうとすることはこうです。先に神によって結ばれた契約は、その後四百三十年たってできた律法によって取り消されたり、その約束が無効とされたりすることがないということです。18 なぜなら、相続がもし律法によるのなら、もはや約束によるのではないからです。ところが、神は約束を通してアブラハムに相続の恵みを下さったのです」。

私たちは肉においてはアブラハムとは関係のない者です。でも、彼の「その子孫」としてのキリストを信じる信仰によって、主と一つにされ、私たちもアブラハムへの祝福を受け継ぐ「その子孫」とされました。ですから、私たちの救いは、私たち自身の正しさや善行によるのではないのです。それは「あなたによって地上のすべての民族は祝福される」と、彼に約束された神様とその約束を信じる信仰にかかっています。

ですから、私たちは主のみことばに進んで聴き従うのです。「祝福されるため」にではなく、すでに祝福された者であるゆえに、喜びと感謝にあふれて、主のみことばに聞き従うのです。聖なる所は、かつては祭司だけが、また至聖所においては、年に一度、大祭司だけが入ることが許されてきました。でも、真の大祭司であるイエスが、十字架にかかり、そのからだとしての神殿を壊されて下さったことによって、聖なる神様と罪人の私たちの間を隔てていた罪は、贖われたのです。それゆえに、この主への信仰によって、私たちはいつでも、どこでも神様に近づくことができます。神様が、聖霊を通して信じる者のうちに住んでいて下さるからです。

いかがでしょうか？ 今日、あなたは主の恵みと信仰によって、ご自分が主と一つにされていること、また、それによって自分もアブラハムの子孫とされていること、それゆえに、神様の祝福としての天の御国を相続する者とされていることを信じておられますか？ 主イエスが、十字架という木にかかって呪われた者となって下さったのは、罪の中で呪われた者であった私たちを、祝福された者として造り変えて下さるためです。

そのことは私たちがどうがんばったとしても、自分でできることではありません。だからこそ、主イエスが来て下さり、ご自分の死と復活のいのちをもって、つまり、福音によって信じる者を、罪の中で呪われた者から永遠のいのちをもつ祝福された者へと造り変えて下さったのです。あなたは、このことを信じますか？ 信じるなら、自分の正しさや頑張りに望みを置くのはやめて、「その子孫（キリスト）によってあなたを祝福する」と約束された主と主のみことばに救いの望みを置いて歩ませていただくではありませんか。